

2020年7月NHK中部地方放送番組審議会

7月のNHK中部地方放送番組審議会は、16日(木)、NHK名古屋拠点放送局において、11人の委員が出席して開かれた。

会議ではまず、ナビゲーション「“未曾有”の就活～新型コロナに翻弄される学生と企業～」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

次に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

(出席委員)

委員長	稲村 修	(魚津水族館館長)
副委員長	松田 裕子	(三重大学副学長)
委員	井口 昭久	(愛知淑徳大学健康医療科学部教授)
	岡安 大助	(中日新聞社取締役)
	榊原 陽子	((株)マザーリーフ代表取締役)
	坂田 守史	((株)デザインスタジオ・ビネン代表取締役)
	玉井 博祐	(能楽師／玉井屋本舗社長)
	徳田八十吉	(徳田八十吉陶房代表)
	成島 洋子	((公財)静岡県舞台芸術センター芸術局長)

(主な発言)

<ナビゲーション「“未曾有”の就活～新型コロナに翻弄される学生と企業～」

(総合 6月19日(金)放送) について>

- 非常に興味深く視聴した。オンライン面接は、受ける方も大変だろうが、採用する側も大変なので、企業がどういう基準で採点をしているのかについても知りたかった。新型コロナウイルスの感染拡大の影響で、採用人数が昨年より減ってしまったり、会社を訪問することもなく入社を決めてしまったりすることへの不安を語る学生が取材されていたが、実際に会社で面接を受けたとしても、入社前の段階では、ほんの一部しか見られず、それほどの違いはないのではないかと思う。実際はそうではないのに、いろいろなことを新型コロナウイルス感染拡大による影響のせいにしてしまっているような印象を受けた。一方で、学生と接触できる貴重な機会である合同説明会が開かれないという大変な状況だが、紹介されていた鋳物メーカーは会社PRの動画作りを新たな取り組みとして始めていた。何か障害が起きたときに、それを乗り越えるために何をするのか、いかに次の一步を踏み出せるかが、大切なのだと思う。新型コロナウイルス感染拡大の影響で何が起きるか分らないなか、そういった新しいことに挑戦

する姿勢が就職活動においても一番必要なのではないかと感じた。

- 学生へのインタビューは、採用人数が減ってしまったことに対する不公平感など率直な思いを引き出しており、会社には言えない本音が出ていてよかった。後半の鋳物メーカーの取り組みは興味深く見る事ができた。従来のような、採用担当者による泥臭い「一本釣り」も、新型コロナウイルス禍でのSNSによる動画配信の試みも、こつこつ続けていかなければならないことには変わりはないと思った。会社説明会よりも、動画配信によって丁寧に仕事をしていることや人を大切にしていること、社会の役に立っていることなどを、より具体的に伝えられれば、企業と学生のミスマッチを防げるのではないかと考えた。番組では新型コロナウイルスによって「困っていること」を中心に上げていたが、大企業が採用を控えているのは中小企業にとっては優秀な人材を獲得する機会でもあり、さらに現代では、SNSなどを使ってお金をかけずに会社のよさを伝えることができる。そういう新しい未来がやって来ているのだということをもう少し強く伝えてもよかったと思う。

- 何でも新型コロナウイルスのせいにするのではなく、これをきっかけに、今までうまくできていなかったことを変えていくチャンスだと思っているので、番組前半で取り上げられていたネガティブな事例は残念だった。新型コロナウイルスのせいにして他人を責める、あるいは新型コロナウイルスそのものを責めるのではなく、自らの責任で何かを切り開いていくといった姿を取り上げてもらえれば気持ちが良かった。そういう意味では後半の鋳物メーカーのエピソードはとてもよかった。17日(金)に放送する「ナビゲーションスペシャル」では、“WITHコロナ”を生き抜くヒントを教えてくださいと聞いているので期待している。また、今回の番組ではオープニングの明るい印象のBGMが内容と合っていないと感じた。この番組はエンディングの音楽が流れ始めると、いつもせわしく番組が終わっていく印象もある。音楽の選び方や使い方も大切にしてほしい。

- 東日本大震災で被災し、地元のために働きたいと就職活動を頑張ってきた女子学生のエピソードは、学生たちの置かれた現状をうまく捉えていた。また、「数か月前の自分に言っても、信じてもらえないと思う。不安だらけだ。」ということばは、今の状況を的確に物語っていた。「オンラインではわからない雰囲気が絶対にある」という感想も的確に射っていたと感じた。しかし、企業の採用活動の縮小、不慣れなオンラインによる説明会や選考、さらには企業情報を集めにくいことなどへの学生の不安に対して、解説はありきたりで物足りなかった。オンライン面接に関して、金沢工業大学での就職相談の場面が紹介されていたが、大学での支援の全体像を紹介すべきだった。鋳物メーカーの取り組みに関して、動画制作の試みやオンラインによる工場案内の様子を

うまく紹介しており、雰囲気よさが伝わってきた。ただ、番組最後の解説は平凡で、全般的に表層的という印象は否めなかった。もっと情熱を持って、学生に語りかけるような番組にしてほしかった。この番組を見ていつも感じてしまうのだが、前半は快調なのに、後半には疲れてしまう印象だった。

- 「新型コロナに翻弄される学生と企業」というタイトルそのものの内容だった。紹介された学生は真面目でしっかりしていたが、就活がうまく進まないことへの焦りが、その表情からよく伝わってきた。また企業側は、合同説明会が軒並み中止となり、知名度の高い大企業と中小企業との格差が広がっている。そうしたなかで鋳物メーカーの社員が皆で話し合い、会社の魅力を紹介する動画を制作し、SNSで発信するという取り組みが紹介されていた。この会社のチームワークや職場の雰囲気のよさがよく分かり、学生からのリアクションもあったということで、大変明るい終わり方だった。これが正解というものはなく、企業側も学生側も、新しい就職活動に対する模索の日々が続くのだろうと思った。

- 新型コロナウイルスの影響に対しては、ネガティブにとらえるのか、ポジティブに向き合うのか。いまはポジティブなこともたくさん言えるようになってきていると感じている。番組を作る上では、いろいろな振れ幅を意識したり、問いかけをしたりする必要があると思う。しかし今回の番組に限って言えば、いまの学生のネガティブさと、企業のポジティブな取り組み、どちらかに焦点を絞った方が、より実効性の高い番組になったのではないかと思う。新型コロナウイルスに翻弄される学生と企業の両者に目を向けることも大切かもしれないが、こういう時だからこそ、企業のポジティブな取り組みに絞り、エールを送るような番組にしても良かったのではないか。そうすれば、ほかの企業にとっても参考になったのではないかと思う。

- 新型コロナウイルス感染拡大の中での就職活動は、大変だと思う。インタビューに答えていた学生は、インターンに幾度も参加し、自己分析や企業研究をしていたのに、不安だらけと言っていてかわいそうだった。就職するにあたり、さまざまな悩みもあると思うので、女性の働き方の現状がどうなっているのか気になった。就職については時代によりさまざまな考え方があるが、新型コロナウイルスによって考え方が変化してきているため、時宜を得た切り口になっていたと思う。会議などのオンライン化が進んでいるが、相手の反応が分かりづらく、寂しさを感じることもある。ことばだけのやり取りで、逆に細部まで見えてしまうこともあって、特有の難しさがあると思う。採用する側もオンラインに対応していかななくてはいけない時代だと思うので、鋳物のメーカーの取り組みはすばらしいと思った。動画をあそこまでうまく作れることに驚くとともに、発案後2日で撮影を始める素早い対応が、今日的だったと思う。

- 生々しい学生の声やSNSで採用通知をするといった採用方法の現状を知ることができた。また、知名度の高くない企業や規模の小さい企業の苦勞を知ることができてよかった。企業と学生では仕事の捉え方に違いがあることを浮き彫りにしていたと思う。企業で働く人は自ら仕事を作り、トラブルが起きたらどうやってそれを解決するのか、それを解決するのは自分であるといった捉え方をしている。それに対して学生は、社会に出てから学ぶこともあるため仕方がない部分もあるが、基本的に受け身であり、その甘さも含めてまだ学生なのだと思った。この機会に、リクルートスーツのようなものの必要性が見直されたり、在宅勤務がいろいろな企業で導入されたりしていくことはよいことだと思う。手取り足取り教えてもらいながら仕事ができるという状況ではなくなり、自らを律して仕事をしていくことが求められる時代になっていくのだろう。これからの学生には対応力や発想の転換が必要であることまで伝えられるとよかったと思う。

- 番組の冒頭で今までは売り手市場だったと語られていたが、新型コロナウイルスの影響が始まる前から採用を控えているという話を聞くことも多く疑問を感じた。就職活動がうまくいかないという話も紹介されていたが、これまでもさまざまな事情で思うような企業に入れなかったという例はたくさんあり、何もかも「新型コロナウイルスのせい」にしてしまうことには違和感があった。大学で行われている就職支援の取り組みは、本当に大学がやるべきことなのかどうか。大学のあり方そのものが問われているようにも感じた。また、企業紹介をSNSで発信する取り組みも紹介されていたが、率直にもともとPRが足りなかったところもあるのではないかと思った。学生、大学、企業それぞれの事例につながりが見えず、番組全体がバラバラな印象が残った。学生も企業も、もともと変わらなくてはならなかったことが、新型コロナウイルスによって顕在化しているのだろうとと思っているので、今後はそうした部分を深く掘り下げてほしい。また、高校生の就職率が落ちているとも聞いているので、就職を取り巻く全体の状況についても取り上げるとよかった。

- 就活に苦戦する学生の、新型コロナウイルスの影響に振り回される理不尽さがよく表れていた。しかし、かつての就職氷河期など、社会は常に変化を繰り返しているため、このような状況は常に起こりうると思う。多くの会社が人材確保のため、定期採用以外の中途や第二新卒など、かつてより柔軟に門戸を開いていると思うので、そういったことも紹介してもらえれば光明も得られるのではないだろうか。就活に限らず、多くの物事でオンライン化が進んでおり、今後は、さまざまな物事の評価もオンライン上ですることになっていくと思う。その中で便利な部分と未消化な部分があり、そもそも会議自体が必要だったのかといったことも顕在化してきている。そういった部分も、もっと掘り下げることができる面白いテーマだと思う。また、学生は日々の

授業などをオンラインで行っているため、学生のほうが企業の人事担当者より一枚上手かもしれないと思った。番組の中の「実際に企業へ行くと、玄関から面接会場に至る間だけで、その会社の雰囲気や社風を感じることができる」という部分は、新鮮な気づきだった。学生側、企業側の双方のマッチングをすることが紹介されていたが、これは過去の取り組みの延長線上に過ぎず、むしろ突然の大きすぎる変化に対応できていないと感じたので、もう一步深掘りできると、双方に解決の光が見えるのではないかと感じた。

- 新型コロナウイルスによって影響を受けている就職活動についても、テーマとしていつかは取り上げられると思っていた。導入部分の映像は興味をそそるものになっていた。番組は、学生、大学、企業という3つで構成されていたが、スタジオ解説でメリハリがつき、分かりやすかった。この番組の価値は、求人側である企業と、求職側である学生、双方の思いを同時に伝えてくれたことにある。企業と学生、双方とも相手が何を考えているか推理しつつ、採用・求職にあたっているということがよく分かった。ただ、大企業と中小企業で状況が異なると説明していたが、そこは映像で示してほしかった。大企業がこの混乱をどう受け止めているのかということについては、物足りなさを感じた。第三者の視点で、学生と企業の双方を眺めることにより、改めてさまざまなことを気づかせてくれた。学生の視点からは、面接の際に感じる職場の雰囲気、社風を肌で感じる機会の重要性を指摘してくれていた。また、オンライン面接での映り具合への配慮など、新たな技法の重要性を知らされた。一方、企業の視点からは、いかに学生の興味を引くか、選考以前に重要なことがあると分かった。中小企業の自信、自負といったものは、直接伝える機会がなければ相手に伝わらない。オンラインであれば、両者の物理的な距離は関係なくやりとりすることができるようになり、お金と時間の制約がなくなると述べていたが、地方の学生、企業にとって有利である反面、ライバルが増え、競争を熾烈なものにしてしまうと感じた。番組の最後に、スカウトやエージェント形式のマッチングについて紹介していたが、説明時間も短く、よく分からなかった。せつかく双方が暗中模索の状態にあることを明らかにしていたので、「この逆境を乗り越えれば」というまとめではなく、「相手も悩んでいる、心配せずに突き進め」といった双方へのメッセージになるものを投げかけてほしかった。

(NHK側)

新型コロナウイルスが就職活動に影響していることをしっかり伝えたいと考えていた。また、今回は学生の素直な気持ちに寄り添いたいという思いを強く持ちながら、番組制作に取り組んだ。学生、企業、視聴者の三者にとって参考になるような事例を紹介できるよう、より意識して番組づくりに臨みたい。一方で、ネガティブなことも含めて現状をしつ

かり見せていく姿勢も引き続き大切にしていきたい。

- 「ナビゲーション」自体への意見もあったが、今後どのようにしていきたいと考えているか。

(NHK側)

「ナビゲーション」は地域の番組として最も歴史が長く、25年以上放送し続けており、地域の視聴者の皆さまに定着していると考えている。これからも地域のニーズによりの確にお応えしていくために、どのように発展させていけばよいのか考えていきたい。

<放送番組一般について>

- 6月5日(金)の静岡スペシャル「君たちを守りたい～“コロナショック”に挑む経営者～」(総合 後 7:33～8:00)を見た。社員の3分の1が外国人労働者である自動車のシートの裁断や縫製を担う会社が、新型コロナウイルスの影響で休業せざるを得ない状況になり、マスクの製造に業務を転換させたことを紹介していた。この会社の経営者は、リーマンショックの反省や、自身がブラジルにサッカー留学をしたときの経験から、人を大切にしたいという信念を持っており、外国人を派遣ではなく直接雇用することで守ろうという取り組みを行っていて、非常に人間味のある方だと感じた。
- 6月16日(火)の「まるっと！みえ」で放送された「コロナ禍 就活生を応援「サンゼロ就活」とは」を津局のホームページで見た。コロナ禍で企業説明会などが中止となり、今までのスタイルでは就活ができなくなった中、大学生が自ら企画した「サンゼロ就活」が紹介されていた。サンゼロとは感染リスク、交通費、移動時間がゼロという意味で、協力してくれる企業に1分程度の動画を作ってもらいサイトに掲載、企業と就活生をつなぐ取り組みだった。就活生に「腐らないでほしい、機会が失われたわけではない、諦めずにやりたいことを見つけてほしい」というメッセージを伝えていたのがすごくよかった。新型コロナウイルスの影響が続くなかで、こうした難しい状況にある人たちを応援してくれるような番組が増えればよいと思った。
- 7月7日(火)のクローズアップ現代+「【梅雨末期の豪雨】命奪う脅威・どう避難“新時代”の備え」を見た。大雨特別警報が各地で発令され、豪雨災害が発生した。水害が一番怖くて身近な災害なので、その被害の悲惨さは目を覆いたくなるありさまだった。しかも、新型コロナウイルス感染拡大防止のために、ボランティアを思うように受け入れられず、高齢化の進んだ地区では重い土砂や壊れた家財などをどうやっ

て片づけたらよいのかと思うと、やりきれなさを覚えた。線状降水帯がどのように発生するのかメカニズムが分かりやすく説明されており、とても恐ろしいと感じた。被害を最小限に抑えるために重要なことは、いろいろな情報を得て、身近な異変に気づき、周囲に声をかけつつ早めに避難をすることだと改めて感じた。

- 7月9日(木)の「かがのとイブニング」で香害を取り上げたりポートを見た。香害とは、人工的な香りから倦怠感や脱力感、頭痛、どうきなどを感じる化学物質過敏症を生じることを言い、初めて聞くことばだった。私も臭いは気になるほうだが、洗剤や消臭剤、芳香剤などをたくさん使うことはあまりよくないと思っていたため、納得できる企画だった。過敏症には個人差があるため、理解を得ることは難しいかもしれないが、大切な問題だと思った。
- 7月9日(木)のクローズアップ現代+「【藤井聡太】進化！知られざるスランプがライバル棋士語る」を見た。AIが将棋や囲碁で人間のプロに勝ったという話は知っていたが、プロが勉強するための大切なツールにまでなっているという話を聞いて、そこまで進んでいるのかと驚いた。さらに、AIによって棋士の強さを分析したり、1手ごとに有利不利をグラフ化したりできることにも驚いた。藤井七段が、新型コロナウイルスの影響で対局の無かった2か月間にAIを使って猛勉強した結果、ライバル棋士が目をみはるほど強くなったことが、グラフ化することで素人にもよくわかった。デビュー直後に29連勝したときには何度も名前を見聞きしたが、今や棋聖戦や王位戦の挑戦者になっている。師匠の杉本昌隆八段が、藤井七段の中には「負けず嫌いのマグマがある」と言っていたが、そのマグマが噴き出してくるのかどうか、今後さらに注目したいと思わせてくれる非常におもしろい番組だった。
- 7月10日(金)の越中とやまスペシャル 富山イドバタトーク！～ちょっこし不満しゃべらんが？～「“コロナ時代”の家事・育児」を見た。富山県民の不満をすくい上げ、本音を引き出す、富山局制作の番組シリーズで、今回は4人の母親がオンラインで出演し、コロナ時代の家事について熱く語っていた。司会の今城アナウンサーが指名しながら進行していたが、話題や話す人の切り替えのテンポが非常に良く、次回を期待させる内容だった。また、オンラインであれば富山県内に限らず、中部地域や全国、世界中から出演者を集めて番組を作ることもできるのではないかと思った。
- 7月12日(日)のダーウィンが来た！「魚が鳥を襲う！ 100万羽の壮絶子育て」を見た。繁殖期にセーシェル島に集うセグロアジサシの子育て、ひなの成長と巣立ちを取り上げていた。この番組は最近「擬人化」等の演出が頻繁に使われるようになっていたが、今回は、番組のホームページに「絶海の孤島で繰り広げられる命の攻防に

密着する」と書かれていたとおり、手に汗握るシーンの連続で、すばらしい映像だった。いつも、この番組を支えているカメラマンや取材クルーの努力は相当なものだと感じており、今後にも期待したい。

- 7月15日(水)の「NHKニュース おはよう日本」を見た。サッカーJ2に所属する石川県のチームが考えたエア遠征プランが紹介されていた。石川県のグルメが自宅に届けられ、それを味わいながらテレビやインターネット配信で観戦できるというもので、コロナ禍ならではの工夫がされていると思った。
- 金沢局ホームページにある特選石川NEWSのページがとても便利だと感じている。先にお伝えした2つの話題も掲載されており、今後もチェックしていきたい。
- 7月9日(木)の世界10代コロナ会議(2)(Eテレ 後 10:00~10:29)を見た。10代で経験することがその後の人生にとって大事だと思っているので、今の10代が何を感じているのか、すごく興味があった。フェイクニュースについて話し合うシーンでは、同じような間違った情報、うその情報に惑わされていて、新型コロナウイルスのような大きな問題が発生したときには、国や文化、人種などが違っても、同じようなことが起きるのだということを感じとっていたようだった。一方で、ネット上に雑誌をつくり、世界中の若者たちが表現する場をつくったという話も紹介されていて、楽しいことも各国で共通しているのだなと思った。若者たちのさまざまなやりとりを見ながら、情報が氾濫しているネット社会だからこそ、NHKには正しい情報を発信し続けてほしいとあらためて思った。
- 7月12日(日)のこころの時代~宗教・人生~「今 互いに抱き合うことーコロナ禍に読む聖書ー」を見た。北九州市にあるキリスト教会の奥田牧師が行っている、聖書にコロナ禍の現状を重ね合わせて話をする活動を取り上げていた。この牧師は、相模原市の障害者施設殺傷事件の植松死刑囚を「植松君」と呼んでいて、人として向き合う姿勢が印象的だった。新型コロナウイルスに向き合っていく中、人類がこうした災害に遭うのは初めてではないということを教えてくれたため、とても心強く感じた。“Withコロナ”の時代に突入していく中で、何を伝えていくべきか。牧師のことばに大変感銘を受けた番組だった。
- 7月12日(日)のズームバック×オチアイ(3)「“自粛”の半歩先」(Eテレ 後 11:00~11:29)を見た。落合陽一さんを編集長に迎えてオンラインで自宅からつなぎ、アーカイブ映像を活用しながら過去を考察し、半歩先の未来を考える番組で、今ならではのテーマが取り上げられていて、とても興味が持てる番組を久しぶりに見ることがで

きた。落合さんの考察そのものもおもしろかったし、日本人特有の「自粛」やマスクを着用することは、利他的と利己的の両面があるといった分析、思考の飛躍の仕方や落合さんならではの視点、番組の作り方も含めて非常に新鮮に感じられた。今後も楽しみにしたい。

○ 6月28日(日)のBS1スペシャル「医療崩壊～イタリア・感染爆発の果てに～」を見た。医療崩壊を経験したイタリアの惨状を報告しており、これを見ると経済優先を主張する人も考え直すのではないかと感じられる、重く、深く、歴史に残る番組だと思う。ベルガモで初めての症例が発見されたのは2月23日(日)だったが、1日にして救急車が不足、数日後には医者不足で皮膚科や歯科まで動員された。助けを求め人を助けられない現実、それこそが医療崩壊であり、説得力のある映像だった。「高齢者を見捨てるのは許されません。いつからこんな国に成り下がってしまったのでしょうか」と言う高齢の医者のことばが心にしみた。医者は命が危ない人ほど助けなければいけないと思ってきた。それが、命が危ない人ほど助けられないという現実が出現したのだった。日本でも起こりうる事態であり、この国の行く先を決める人たちにとって必見のリポートだと感じた。

○ 6月26日(金)、7月3日(金)の「レギュラー番組への道 最後の〇〇～日本のレッドデータ」(BSプレミアム 後 11:15～11:45)を見た。実は5月1日(金)に59分版をタイトルにひかれて見たのをきっかけに、5月8日(金)の「金とく」と合わせて、都合3度視聴したことになる。同じ内容を少しずつ変更して3回放送していることから、制作者の伝えたいという思いを強く感じた。タイトルからは内容が想像しづらく、絶滅生物の特集番組だと思って見始めてしまった。実際には、日本が誇るべきものであるが途絶えてしまいそうな技術や技法の話であり、結果的には興味深い内容だった。「ろくろ」と「木桶」の技術が途絶えてしまうと、ユネスコ無形文化遺産である和食や歌舞伎といった日本文化も維持できなくなることを知って驚き、とても印象に残った。クラウドファンディングによる資金集めの試みを紹介していたが、後継者の育成策、可能であれば競えるくらいの複数の人材育成のほうが必要だと思う。寿命の長い商品は、伝承者がいなくなっても50年困らないと発言していたが、技術者を育てるのにも50年はかかってしまうことを忘れてはいけない。ぜひとも、番組をレギュラー化して、同じような境遇のさまざまな業種に光を当ててほしい。なお、スタジオのセットが気になった。わざわざ高齢の技術者に階段を上らせて登場させる必要はないと思う。そういった演出に時間を使うのであれば、現地を訪ね、技術者の手や使い込まれた道具などを紹介したほうがよかったのではないかな。

○ 7月3日(金)の美の壺 選「日々を潤す ビール」(BSプレミアム 後7:30~8:00)を見た。絶妙なタイミングでビールに対するさまざまなうんちくが盛り込まれていたの
で、番組に引き込まれ、あっという間に終わったと感じた。これからは、「とりあえず
ビール」などと言わず、ビールの歴史や味はもちろん、注ぎ方による泡のでき方、色、
香り、音、器、合わせる料理など、じっくり楽しみたいと思った。最近、新型
コロナウイルスの影響によって家で飲む回数も増えているが、在宅でもいろいろ楽し
めると思った。こういう番組は、このような時期にテレビで見るのにふさわしいと思
う。

NHK名古屋放送局
番組審議会事務局